

令和 5 年 4 月 5 日

ディプロマポリシー評価表（ルーブリック）による学習成果の検証について
（自己点検評価・改善委員会）

IR 室

学生の学習成果を確認するため、令和 4 年度の 1、2 年生について「ディプロマポリシー評価表（ルーブリック）」により検証した結果を報告いたします。

記

1. 事情

- (1) 現在大学に求められている「教育の質保証」について、文科省では以下の対応を求めている。

「学生本人の学修成果の把握や学修の動機付けのために、単位認定、学位授与、卒業判定とは別に、以下のいずれかの手法を用いて学修成果の把握を行い、学生へのフィードバック及びその結果を大学等の教育活動の見直しに活用しているか」

- ①外部の標準化されたテスト等による学修成果の調査・測定（アセスメントテスト）
- ②学修評価の観点・基準を定めたルーブリックの活用
- ③その他（アンケート調査や学修ポートフォリオなど）

条件としては、以上の方法について、「在学中に 2 回以上実施することを機関決定しており、かつ基準時点の期間内（前年 10 月 1 日～翌年 10 月 31 日）に 1 回以上実施していること。」学生本人が自らの学修成果を把握することを前提としているので、無記名のテストや調査等は対象外。

- (2) 本学では①の外部の標準化されたテストとして PROG を採用し、入学直後、1 年生終了時点（2 年生目前）、2 年生の卒業目前の計 3 回の実施を機関決定している。
また、②のルーブリックを利用した個々の学生との面接は年 2 回、在学中 4 回を目途として実施することを機関決定している。
- (3) ディプロマポリシー評価表は、ディプロマポリシーへの到達度を具体的に詳細に設定、かつ数値で分かりやすく表し、ルーブリックとしてシステム化している。
- (4) 個々の学生への指導には、外部の客観的テストである PROG とディプロマポリシーの到達度を表すルーブリックの両方を用いてあたっている。小規模短期大学の強みである「丁寧な指導」を徹底している。

2. 分析方法

「ディプロマポリシー評価表（ルーブリック）」を活用し、1年生、2年生の前期に実施した第2回目の記録と、後期に実施した4回目の記録を学生個人別に比較した。

（両方の回に参加した学生を対象に、各学生個人の伸びを計測）

（注）ルーブリックはディプロマポリシー評価表でDP1（知識・技能）、DP2（主体的行動力）、DP3（課題解決能力）、DP4（多様性受容力）、DP5（日本の伝統文化理解力）についてレベル1～6まで詳細に条件を規定し、卒業までに4のレベルまでの到達を求めている。

3. 分析結果

検証する期間は約半年間と短期間であるが、DPごとの数値の伸びは1年生で0.68～0.82、2年生で1.06～1.27と順調。少しずつではあるが、学生が成長していることが感じられる。特に2年生の成長は著しく、別添グラフを見ても成長度合いは歴然としている。DP1～DP5の到達度合いは平均は4.76～4.81であり、学位授与のレベルに到達している。

4. その他・意見

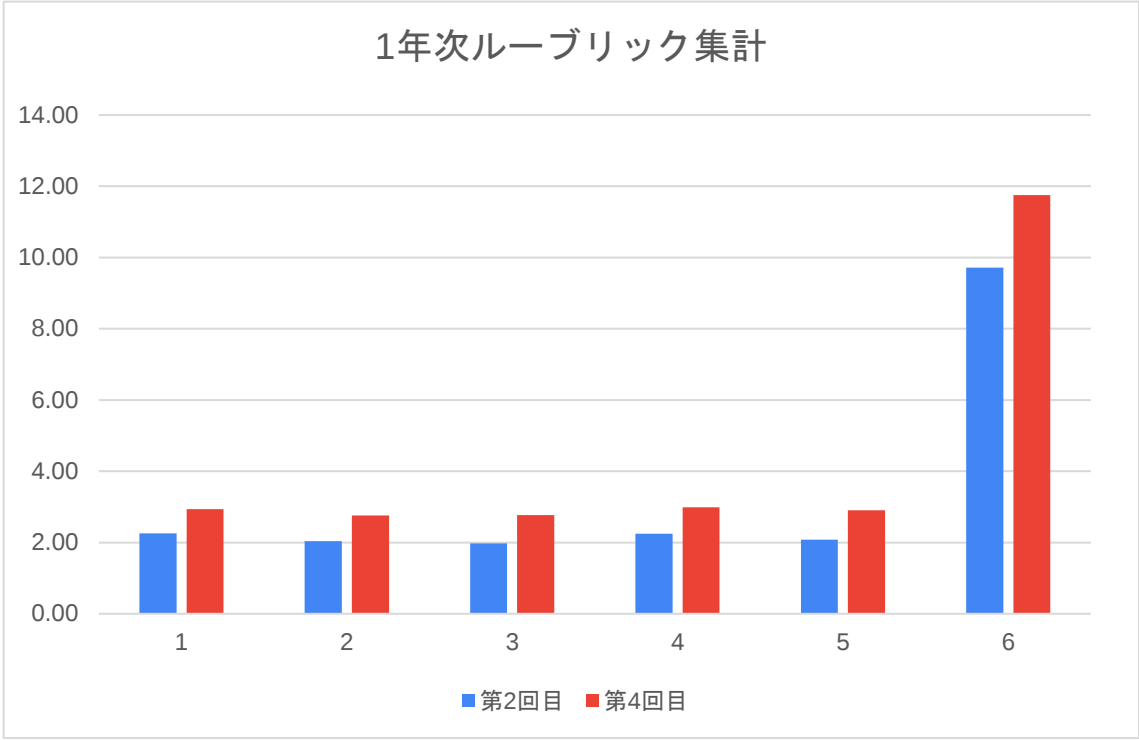
(1) ディプロマポリシー評価表（ルーブリック）を利用した面談は学生にも好評である。

学位授与方針であるディプロマポリシーについて、学生自身がどこまで到達しているのか具体的に見えることで、勉学・生活・将来への意欲が湧いてくるとの声が聞こえる。

(2) ディプロマポリシー評価表（ルーブリック）の導入により、より客観的な視点で学生を指導できるシステムが出来上がっている。今後は学生へより丁寧な指導を行い、長所は伸ばし、不足している点については補って、学生自身が自分の成長を実感でき、自信を持って社会に巣立って行ける教育体制の構築が必要である。

以上

	知識・技能	主体的行動力	課題解決能力	他者受容	日本の伝統	総合
第2回（平均）	2.26	2.04	1.98	2.25	2.08	9.72
第4回（平均）	2.94	2.76	2.77	2.99	2.91	11.76
差異（伸び）	0.68	0.72	0.79	0.74	0.82	2.03



	知識・技能	主体的行動力	課題解決能力	他者受容	日本の伝統	総合
第2回（平均）	3.61	3.61	3.59	3.70	3.49	17.51
第4回（平均）	4.78	4.81	4.78	4.76	4.76	22.24
差異（伸び）	1.17	1.20	1.19	1.06	1.27	4.73

